

『教会と戦争』

2016年10月20日

〇・T姉が「読んでみて」と、川端純四郎氏の『教会と戦争』を貸してくださった。川端氏は東北学院大学文学部キリスト教学科の教員を長く務め、日本基督教団、讃美歌委員会、世界教会協議会などで活躍された方である。2013年にご逝去された。友人とご家族が、残された論文や講演を編集して、今年の5月に『教会と戦争』を出版した。川端氏のキリスト者としての誠実さに感銘を受け、私自身の信仰を問い直す機会が与えられた。

川端氏は牧師の家庭で育ち、熱心な教会生活を送り、宗教哲学を学んでいた。学生時代、ドイツ留学の機会を得、お金がなかったので、飛行機ではなく、船でしかも貨物船でドイツに向かった。途中、ボンベイに停泊し、下船した。何百人もの人々が寄って来て「お金をくれ」とせがまれ、足が震えた。私がバングラデシュで体験したのと同じであろう。彼らの貧しさを見て、私の頭は真っ白になった。川端氏は実存主義哲学に関心を持っていたが、今を問う実存主義は何の力もなく、経済こそが大切であると目覚め、帰国後、経済学を徹底して学んだという。また、ドイツの大学で中国人に出会ったが、全く口を利いてくれない。ようやく友だちになり、彼は家族が日本兵に虐殺された事実を話してくれた。そこで、歴史に向き合うことの大切さを知らされたという。私も子どもの頃、戦争映画を観て、日本は痛めつけられたと被害者意識を植えつけられていた。在日韓国人の友人から、「これを読め」と言われ、数冊の本を貸してもらった。そこで、アジア・太平洋戦争は日本がアジア諸国を侵略した加害国であったことを知らされた。川端氏は戦争の加害性を厳しく捉え、また、戦争中に誕生した日本基督教団の戦争に全面協力した事実を重く受け止めている。1967年に、時の教団議長・鈴木正久牧師の名で出た「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」に不備もあるけれども、悔い改めと謝罪に、和解と平和の道が開かれると力説している。

日本のキリスト教徒数は、カトリックが35万人、正教会が3万人、プロテスタントが60万人で、合わせても100万人余である。しかし、日本の近代化の中で、キリスト教徒の果たした功績は大きい。川端氏は、① 学校や病院、福祉施設の設立。② 近代的自我の確立。③ 一夫一婦制や男女同権のモラルの確立。④ 西欧文明の代弁者。⑤ 国際性を広げた。⑥ 禁酒禁煙運動、廃娼運動、部落差別撤廃運動、また、反戦平和運動などの功績を列挙している。明治、大正期のマルクス主義、共産主義運動と重なっていたが、昭和期以降、教会は急速に影響力を失くしていった。川端氏は、その原因は天皇制と対決しなかったことにあったと言う。日本最初のプロテスタント教会の規則には「皇祖土神の廟前に拝跪すべからざる事」「王命といえども道の為には屈従すべからざる事」と革命的な条項が列記されていた。しかし、世間の非難を恐れ、公表することなく、心の内に堅守すべきものとされた。心では天皇を神とは認めないが、口にしない、二元論に陥ってしまった。アジア・太平洋戦争では天皇神話が侵略戦争の土台になったが、少数を除いて、天皇神話の批判を捨てた教会は戦争に反対することは不可能になった。

川端氏は、信仰は魂の救いであり、社会とは関わらないとした二元論が教会の生命的なメッセージを失わせたと言う。教会は「キリストの主権」告白に立つ。キリストは教会の主であるだけでなく、世界の主であるという告白である。キリストによって赦されている全ての人々の人権が尊重され、共に生きる平和が実現する「神の国」を言葉と行動において目指す。川端氏から、そこに教会の使命があると聞いた。